

障害のある人の表現活動と発達

特集

発達保障と表現活動

川地 亜弥子

要旨

表現活動と発達保障において重要なことは、表現した（もしくは表現している）本人にとっての意味を、できた作品だけでなく表現活動のプロセスそのものに共感しながら理解することである。表現を通じてその人の発達を理解できたり、他の人へのよい影響が見られたり、表現が社会的に高い評価を得たりすることも重要であるが、それは副次的なものである。戦前の作文教育においては、子どもを自由に表現指導とその研究が行われ、子どもの内面に注目することの重要性や、子どもに身近な言語で語ることは是非について議論が交わされた。現代における表現活動と発達保障を考える上で重要な知見を提示している。

キーワード 表現、発達保障、表現技術、自己表現、作文

1 なぜ表現活動を大事にするのか

(1) 表現に心動かされる

私たちは、なぜ人間の表現を大事にするのだろうか。表現といっても、何をあらわしたいのか、あらわしているのか、もしかするとつくった本人にもよく分からないのではないか、と思われる作品もある。密度高いぐるぐるがき。細かく、細かく、ちぎられた粘土。一塊の粘土に、無数につけられた小さな穴。こうしたものを見たときに、思わず「すごい…」と言葉が漏れる。表現の持つ力である。

私の子どもの話で恐縮だが、3歳になったばかりの頃に、保育園で画用紙いっぱい密度の高い1つのぐるぐるがきをかいた。青、緑、赤、黄色、オレンジ、いろいろな色でぐるぐるかかかいて、混じっているところは茶色や紫に見える。

最後に肌色で上からまたぐるぐるとかかかっている。担任の先生は、「いやー、これはすごいと思って！」と言って、その絵を園の作品展覧会で飾ってくれた。

3歳というと、円錯画（ぐるぐるがき）を卒業して、たくさんの閉じたマル（マルのファンファーレ）や、簡単な顔をかいたりしはじめる時期だ。その頃、非常勤で発達相談員をしていた私は、「3歳でぐるぐるがき…」と、余計なことを考えてしまった。しかし、その先生は、子どもがぐるぐるかいた、その作品や作品が生まれるプロセスのエネルギーの高さに心動かされたのだ。

子どもや障害がある人の表現は、こうして周りの人の心を動かした後、園、学校、職場、施設でしばらく飾られたり、家で大事にとっておかれたりする。場所がない、壊れた、などの理由ですぐにしまわれたり、捨てられたりすることもあるが、いずれにせよ、表現したその人を守る大人がいる場所で、大事にされるケースは少なくないだろう。

(2) 表現のよさを味わい共有することと、表現者自身にとっての意味を大事にすること

一方、身近な人から不安や不満が出ることもある。「同じものばかりつくって」、「同じことして…」、「意味がわからない」と受けとめられてしまうことがある。そこまではいかなくとも、子どもの表現に魅力を感じつつも、「こればかりでいいのか」と、心が揺れることもあるだろう。

その時には、自分が子どもの表現に魅力を感じていたら、それを語っていくことが重要である。また、自分ではなかなか感じられなくても、他の人と共に味わう、語り合うことで発見できるよさもある。その際に、表現した人の気持ちに寄り添って、共感的に味わうことが求められる。作品を値踏みする（鑑定する）ような方法ではなく、「なぜこうしたのだろう」、「こんなふうに表示しているときってどんな気持ちだろう」と想像して味わうのである。表現された作品を解釈するに留まらず、表現しているその時、その瞬間のおもしろさを理解していくのである。特に、誰かを感動させたくて表現するのではなく、自分がそうしたいからそうしている、そうした方が落ち着くからそうしている、という説明がぴったりの表現については、表現しているときの内面に注目することが必要だろう。

共感的に味わうこと、感動を共有することは、わかりにくい作品にだけ重要なのではない。社会的に高い評価を得ているような作者の作品にも大事なことである。他者からの評価を気にする人の場合、ほめられる、作品が売れる、展覧会に出される等のことが、逆に表現を縛り、「ほめられるからもっとしなくては」、「売れるようにしなくては」という思いで苦しくなることがある。もし、そのような思いになっているのではないかと周りの人が感じたならば、「この表現方法から離れてみる」、「別のことをする」、「やめてみる」ことを提案することも重要である。

その後、しばらく表現をしないように見えるかもしれないが、待つことが重要である。高知で長

く作文教育に関わってきた田中郁は、高知の先輩、廣田早紀から深く学んでいる¹⁾。「郁さん、子どもたちに『書かせる』ことにこだわっていないかね。待つこともたいせつだよ」という廣田の言葉。また、廣田の著書『花の薫りはそれぞれに』（南の風社、1993年）の中での次のような言葉。「生活が文を生み、文が生活を生むのだと考えている私からすれば、この『書く以前』をいくら強調してもしすぎることはない」、「子どもが文を書く気になる生活、文を生む基盤となる教師と児童との固く結ばれた生活」、「『子どもが文を書くのは、鉛筆でもない、紙でもない、教師と児童の距離である』と言うのは私の貧しい経験から考えても至言である」。田中は、この廣田の言葉が心の中に奥深く刻み込まれている、という。

もう一つ、田中郁の指摘で注目したいことは、子どもの表現はその子自身のものなのであって、子ども理解のためやその子の周囲にいる友達のために役に立つというのは副次的なものである、という指摘である。「綴方を読むことによって、教師がその子のことを理解することができたり、学級の仲間がつながったりするのは、綴方の持っている力の副産物だ。一番大切なのは、文を綴っている本人にとっての書くことの意味を考えることだ²⁾」と、田中は述べる。作文教育では、その子自身の自己表現を重視するのである。

このことと関わって、作文教育に関する研究団体である日本作文の会の作品観の変化について述べておきたい。日本作文の会では、1991年頃から、「教師が書かせたい作品から、子どもが自ら書きたいことを自由に表現させる作品へ」、「『表現をどう指導していくか』から『どう共感的に受けとめていくか』への転換³⁾」があったと指摘されている。これは、「子どもたちの書きことばによる表現活動は、あくまでも自由で主体的なものであり、その活動自体の中に子どもの発達の原動力がある」、また、「書き綴る活動の中に、自己を取り戻し抑圧から解放していく働きがあり、外界へのものの見方も変わっていく⁴⁾」と書くことの意味をとらえたためである。

かわじ あやこ
神戸大学大学院人間発達環境学研究所